

# 形式化と普遍化

本 田 謙 三

第一部 形式化——論理的なるもの、本質に就ての考察

A、心理的判斷作用

B、文法的命題

C、數 理

D、範疇形式

E、論理の原始態

F、論理的價值性

第二部 普遍化——具象的對象一般に就ての考察

A、命題自體一般

B、Objekt 々 Objektiv

C、高次の Objekt

D、Objektiv

形式化と普遍化

E、可能態の連続性

F、概念論への一寄與

フツセアルは其著 „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie“ I. Bd. 1913 の冒頭に氏の所謂純粹現象學に必要な基本概念の種々を述べて居るが其内純粹現象學の方法と單なる論理的方法との區別を明するに資すると信じられるのは „Generalisierung“ と „Formalisierung“ との相違である。Formalisierung とは具象的なるもの Sachhaltiges を純粹論理的意味で形式的なるものに一般化することであり、一旦形式化されたものを具象的なものに戻すには、形式の空虚を充すといふ意味で形式を脱せしめる必要があるが、何れに至るにも何等の階梯なく一飛に通ずることが出来る。反之 Generalisierung は對象を種と類の系列に配する事であり、段階の別の存する事が前者と趣を異にする。對象を種と類とに配するといふ事は種々の意味に解せられるのであつて問題は此處に胚胎するのであるが、フツセアルは特に絶對的に獨立な對象即ち Konkretnum を最低の種とする場合に就て其獨立性具象性が最高の類に迄及びそこに立せられる最高の類は具象的類として範疇の如き非獨立

性を具ふるものでないとし之を“Region”と名付けて居る。(Vgl. Ibidem §§ 13—16) 私  
 は以下に於て論理的公式化の特質を明にすると共に純粹現象學の方法の特徵を語  
 るものとしての Generalisierung とは如何なる手續を意味するかを究め度いと思ふの  
 である。

## 第一部 形式化

形式化とは具象的なものを純粹論理的なる意味で一般化する事であるとするな  
 らば、この場合純粹論理的とは如何なる謂々であるか。私は先づ純粹に論理的なる  
 ものの本質を明にせねばならぬ。

### A

論理的なるものは最初に心理上の作用と解釋される。眞と偽とを判別する思惟  
 作用が論理的機能である。心理上の出來事である點で他の知的作用並びに情意作  
 用と異らないが、之は知的作用の一として情意作用と分たるばかりでなく、自發的  
 能動的なる點に依て受容的靜觀的な知的作用としての表象作用と區別される。更

に眞偽の對立を劃する標準を求めようが爲めに論理的思惟作用はリップスに於けるが如く、意識の對象に依て即ち客觀的に制約せられたる表象」と規定され (Th. Lipps, *Grundzüge der Logik* s. 4) 或はツントに於ける如く自發性・明證・普遍・妥當性の三者を以て其一般的標徴と看做される (Wundt, *Logik I Bd.* s. 76ff.) のであるが、この場合限定の内容が全て心理的性質に分解され、その特殊の結合に他ならない以上、論理的なるものは殘なく心理的なるものに溶解され了るのであつて之れを徹底させればリップスの如く「論理學は心理學 (リップスがこの場合意味する所の心理學は經驗心理學の如く個人の意識に關する學ではなく、直接なる主觀的經驗を取扱ふ所の意識の學を指すものである事 (Lipps, *Inhalt und Gegenstand, Logik u. Psychologie* s. 562) には此處では敢えて立入らない。) の特殊科目である」と明言しないわけにゆくまじ。 (Op. Cit. s. 2)

心理上の事象は自然必然の法則に支配され、其必然性は時間中に繼起する實在的事實に妥當するに過ぎない。然し論理上の眞と偽とは時間に於て眞なるもの或は偽なるものを意味しない。自然必然の法則性それ自らの眞理性を保障する如きあるものが論理的妥當性である。自然必然の當徹る界は時間的實在であるとしても其法則性自らは時間を越えて居る。心理上の事象といふ如きものも因果法則とい

ふやうな必然性に結ばれて成立するのであるとするならば其必然的法則そのものゝ妥當を保障する所の論理的なるものは又心理的なるものゝ根據であつて之を却て心理的なるものから派立せしめようとする事が事理を逆轉させるものであることは明白である。軌近論理學は論理的機能を専ら心理作用と解し去らうとの試を論理學上の心理主義として之を排斥する事に努力し來たつたのである。そして之は宜なる事である。

## B

思惟或は判断を以て心理的事象であるとしても其は何等かの形で客觀的に表示されて初めて論理的思惟として確立される。心理作用としての判断は先言語の形に表示される。言語に綴られた判断を命題と謂ふ。ジェボンズも言つて居る、如何なる判断も言語に表されない間は論理學の對象にはなり得ない。(Levons, Elementary Lessons in Logic p. 10) 而して言語に綴られた命題即ち文章の關係形式を究める學は文法學である。實に古來文法學は心理學にもまして論理學と密接な關係に立來つたのであつた。シグワルトは判断の發生する方面を心理學が研究すると共に、

一旦命題化された判断の理解の方面は文法學の擔當する所であると述べて居る。  
 (Ch. Sigwart, *Logik I*, Bd. s. 30ff.)けれども言語的命題が特に論理的なるものゝ表示と考へられるのはかゝる表出と理解といふ如き點からではなく、其を以て判断者の體驗、其判断の受領者の理解的共感といふやうな心理的事實を離れて其とは獨立に客觀性を保持すると信じられるが故である。

文法上の命題が主辭と實辭と繫辭を有する様に論理上の判断は主位表象と賓位表象との結合から成ると考へられる。この二つの位置を占める判断の要素は判断の成立に不可欠な要件とされるが故に、偶々非人稱命題の如く論理上適當な主位表象を見出し難いものゝ存する時には其判断としての價値に就て又其主位を何に求むべきかに就て種々なる論争を生ずる結果ともなる。(シグワルトとブレンタアノの判断論を信ずる人々、特にマルタイとの論争を指す。因にブレンタアノの判断論の取る特異な位置に就ては稿を更めて述べ度い。)かく判断を文法的命題に擬へて考察することは論理上重要な形式關係を見出す手懸りとなつた事は争はれない。そればかりでなく、言語的表現は經驗的發生的見地を離れて純粹に先驗的なる法則性を有するものである。フツセアルの所謂純粹文法學に於て究められるものがそ

れである。言語的表現は表現に與る感性的なるもの一切を離れた、意義の内に其核心を有する。然しこの先驗的なる意義は何ものかを指示することを特質とするが、言語の純粹形式は指示されるものゝ何ものたるに拘らない。この意味でそれは對象的妥當性を有するものではない。(Vgl. Husserl, Log. Unters. II 13d. IV. Unters.)

然るに論理的なるものは意義の指示するあるものに就ての眞偽を決する形式である。意義の内容に就て妥當するものである。意義の内容は心理現象ではない。表現が意義となる時既に時間的實在性を脱して居る。けれども内容に拘らず妥當する意義そのものゝ法則性と意義の内容の法則性とは區別されなければならない。論理的なるものが言語の形をかりて表示されるからと言つて、言はゞ表示の一手段である所の言語の意義形式と其に依て表現される論理的なるものゝ對象形式とは混同されてはならぬ。唯文法上の命題は心理的事象を意義と化する事に依て論理的なるものゝ先驗性を覺らしめる。

尤も文法的命題は論理學に正しき方向を教ふると共に、他面斯學に種々なる謬説を生む起因ともなることは疑ふ事が出来ない。といふのは論理上の唯物論が此點に根ざして居ることを謂ふ。此處に論理上の唯物論と稱するのはバラギイがボル

ツァノの論理學を評して唯物論的嫌ひがあるとした其意味であつて (Vgl. Palagy, Kant und Bolzano s. 82, 92) 即ち前述注意した點を顧みず思想と其記號、内容と其表示手段とを混同し後者を直ちに前者と看做すといふ事を第一に、更に言語的命題が文章形式に基いて自由に離合できるやうに論理的判斷も亦要素的なる表象或は概念に分解する事ができ、其を機制的に結合して生じ得るものと解するといふ二重の意味を包含して居る。前半の意味に於ける唯物論の誤なる事は既に述べた。又判斷を要素に分解しその要素を恰も化學の元素の如く解し、融合に依て判斷を生ずるとするのは判斷を以て何等か實在的事象と解する事であり、前に排斥された心理主義の誤を脱し得ないものである。總して論理的機能は必然的根據に基いて眞偽を判別する點に存するが故に、判斷と獨立した表象或は概念を固定せる實體と解する事は不可能なことである。實體は判斷の結果存立し得るもので判斷の前提とはなり得ない。輒近論理學は判斷の心理化と同様、概念の實體化を斥ける。概念は其内容ど、諸々の内容の統一の形式とに就て立言する判斷即ち定義と等置さるべきものでこの意味に於ける定義こそ概念そのものであるとしシグワルトやリツケルトも述べて居る。(Sigwart, Logik I. Bd. s. 385ff. H. Rickert, Zur Lehre von der Definition. s. 56ff.)



斯く文法上主辭たり賓辭たるものと判斷上主位たり賓位たるものとは必ずしも對應しないばかりでなく、文法上個々の言葉は文章と分たれても尙、文法的に存立し得るに反し、論理上の概念は判斷を豫想しないでは全く感性的な記號としての他何等の意味もないものである。論理的なるものは心理的なるものに對して對象的であると共に言語的表現の把持する對象でもある。この意味で論理的なるものは超文法的組立を有たねばならぬ事はラスクの言ふ通である。(Vgl. Lask, Lehre vom Urteil, S. 41ff.) 純粹文法學的形式の如きも未だ純粹論理的形式とは稱し得ない。フッセアルも意義の表示形式の法則性を「Das Apophantisch-Analytische」として、意義の純粹論理學のより高い目的である所の「意義の對象的妥當の法則」から區別して居る。(Log. Unters. IV, Unters. S. 13. S. 14.) 論理的なるものは心理的なるものからと同様に文法的なるものからも純粹でなければならぬ。

## C

論理的なるものは心理上の事象と異り先驗性を具備すると共に、其先驗性が文法的意味に止り得ない事は明になつた。所が由來先驗的なるもの、標本は數學的

るものに求められるのが常である。論理的なるものも數學的なるものに包攝さるゝのではあるまいか。私は次に此間に答へねばならない。

ライブニッツは論理學上の一法則としての三段論法を以て代數の計算微分法の解析なごゝ同列に専ら形式の方により、他に何等の補も要せずして、推理さるゝ所の „les arguments en forme“ の一となし、而して元來數學的なるものはかゝる特質を具ふるものであるが故に一切の „les arguments en forme“ たる Mathesis universalis の種たるものであると述べて居る。(Nouveuu Essais, English Translation by A. I. Langley p. 550f.) フツセアルもこの句を引用してライブニッツが純粹論理學の意圖を大半覺て居た事の證據とし、氏自らも其純粹論理學の目論見に於て斯學最高の目標を、單に現存する理説ばかりでなく、可能なる理説一般をその形式に従て先天的に究むる所の「特殊の學を要求して居る。而してかゝる可能な形式に従てのみ規定された理説一般の對象領域は、數學者が數學の範圍に於て集合 Mannigfaltigkeit と稱するものに他ならないものであるから、純粹論理學の最高の目標は數學者に依て半認められて居る理想を更に純粹に發展させたものとしての純粹集合論 reine Mannigfaltigkeitslehre でなければならぬ」と言つて居る。(Log. Unters I. Bd. 11 Kap. 8. 69ff.)

此處に純粹集合論と名付けられるものが何を意味するか。果して其は單なる普遍數學に止り得るか。其が必然的に凡ゆる可能なる理説の根源に還へる事に依て一方意義の研究となり他方意義の充實を齎す純粹意識の考察となつて狹義の論理學及び心理學の一層根底に横る先驗的學としての純粹現象學に至る道程は本論の進行と共に自ら理解し得ることゝ考へる。<sup>\*</sup>唯、數學的なるものゝ範圍と先驗的なるものゝ範圍とが直ちに合致する事には疑なしには居られない。論理的なるものも數學的なるものと同等の權限に於て先驗的なるものに與り得るのではないか。論理學の窮極目標を純粹集合論に置くといふ意味に於ては却て數學的なるものは論理的なるものに包攝さるゝとも考へ得るのではないか。

\* Bryce Gibson („The Problem of Real and Ideal in the Phenomenology of Husserl“ in „

Mind“ July 1925) の所説は結論は形而上學的嫌ひがあるが論理研究初版以來の

フツセアルの思想上の發展を述べて適切なものがある。

既に數學上の一と論理上の一者、數學上の Plus と論理上の und との意義の相違に就ては夙にリッケルトが明晰に論じ盡した所である。(H. Rickert, Das Eine, die Einheit und die Eins) 私は専ら「形式化」といふ視點から數學的と論理的との異別を吟味し度い。

數といふ性質は一個の關係概念として他の區別、相等、相異などの概念と同様、對象そのものに附著せるものでないといふ事は論理學者の述ぶる所である。例へば區別は對象に就て直接の表象として與へられない。對象と對象とを相關係させ區別する思惟作用に依て新に附加されて初めて區別といふ表象は發生する。従て一切の關係概念は思惟作用を特に反省することに依て成立する反省的概念である。この事は數に就ても當筈である。三といふ表象が成立するのは我々が三個の事物を見、それが二個或は一個の事物と異つた印象を與へるからではない。同一の直觀が繰返されながら然も空間的に或は時間的に區別されてゆく場合、一方統一を保持し他方其各々を分別する作用そのものが意識され、且前に立つ統一が次に來る統一に漸次包括されるといふ思惟の過程から數といふ概念は生じるのである。數の相違は一の統一から他の統一への進捗といふ作用を反省し意識する事に依て生ずる内容である。シグワルトも述べて居る。(Vgl. Logik I Bd. s. 44ff.) 田邊博士も數の成立には對象が單にあるものと定められるのでは足らず尙思惟せられたるものとして立せられねばならぬと言ひ、この意味で數は反省的思惟の對象であると斷じて居る。(田邊元) 數理哲學研究 八四頁以下參照)

果して數の概念がかゝる反省的概念であるとすればその結果としてその妥當性は制限を受けねばならぬ。ヴィンデルバントも數學の範疇を以て反省的なる相等性の概念に存することを認めるのであるが總じて反省的範疇は關係付ける意識に依つて反對して成立するに過ぎず其妥當性は對象的ではなく表象的に過ぎない旨を述べて居る。(W. Windelband, Vom System der Kategorien s.48) 他方論理的なるものも相等性の原理に支配され、判断は主位概念と賓位概念の外延の相等異別との關係と解され、概念の外延の廣狹を決するものは其内包の相等と區別であると考へられる。かくて要素的内包の多寡に従て一切の對象が外延的關係に更められ所謂全體と皆無の原則に制約されて、此處に形式論理學の世界が成立する。形式論理上の法則性は數學に於けると等しく相等性の原理に従ひその結果は遂に思惟とは「計算の一種」と化するのである。(Ibidem s. 52ff) 従てもし形式論理を以て論理的なる唯一の典型とするならば、其は數學的なるものゝ範圍に取入れられると解して差支へない。唯、論理的なるものゝ妥當性は數學的なるものと同じ様に反省的表象的であるに止つて對象的であるを得なくなる。然しこれは論理的なるものが眞偽を客觀的に決定するものであり、凡ゆる認識の標準を供するとの特異なる地位に撞著しないであらうか。

例へば一の概念を其類に従屬させるといふことは思惟に取つて形式論理上考へられる如くしかく隨意な事ではない。シグワルトの言ふ如く種と類の段階を形作り得る概念は必ず一つの範疇に屬して居らねばならない。(Logik I. Bd. s. 303) 此處に範疇とは概念の階列を通じてその内包の統一の仕方を客觀的に決定する契機であつて、これに基いて初めて内包の取捨即ち限定と總括とを意味あらしむる如きものである。かゝる範疇を豫想しないでは論理上概念の段階を云々する事は意味がない。同様に主位概念と賓位概念とを綜合統一する必然的な形式なくしては判断は成立し得ない。そればかりではない、概念そのものゝ内部に就ても種々なる標徴の以前に其等を秩序だてる何ものかを前提せずしては抑々概念は存し得ない。常に論理的なるものゝ客觀的必然性は内包の相等と異別、外延の廣狹の以前に先驗的にして然も對象的なる契機に依て保持されて居る。眞と偽とは反省的範疇ではなく、對象的範疇である。意識に對して眞なるに止るのではなく對象として成立するが故に眞なのである。

斯く論理的なるものゝ本質が形式論理に盡されず、判断の必然性を把持し、概念の内包の統一を擔ひ、概念相互の上下の位置を決定する特殊の形式が要求せられ、これ

は最早思惟する意識に依て又それに對してのみ妥當するに過ぎざるものではなく、對象そのものに基きそれ故に客觀的妥當性を要求するものであらうとするならば、この意味に於ける形式に依て變容する事は數學的形式化とは其趣を異にすべきは明である。私はかゝる理由に基いて論理的形式化と數學的形式化従ては形式論理的形式化とは異なるものである事を斷じ度い。然らば反省的妥當性のみならず對象的妥當性を有する範疇の形式化とは如何なる事を意味するのであるか。

## D

論理的根本機能は判斷である。眞偽を判別せずしては思惟は其務を果さないと思へられる。而して此場合判斷の下に意味する所は心理作用でもあり得ず單純なる文法的命題でもなく、さりとて主位概念と賓位概念との内包従て外延の反省的異同の關係にも歸し得ない事は前節で知つた。

此處に於て判斷とは意識一般の規則としての範疇に従つて事柄を統一することにあると主張される。判斷従つて思惟の必然性と妥當性とを擔ふ所のものとは範疇である。範疇は心理的意識の自然必然的法則ではなく、其の當に則るべき先天的形

式である。判断は對象の模寫といふ如き機制的事象ではなく、先天的範疇に則り事柄の秩序を見究むる手續である。其の心理的働きではなく、先天的な範疇への準據といふ意味で超越的事柄であり、物のある様ではなく當に在るべき權利を問ふ事である。萬象は範疇を俟たずしては其の在るべき相を顯はにする事が出来ない。この意味で對象は範疇從て意識一般に基いて初めて可能となると言ふ事が出来る。こゝはカントのコペルニクスの轉回の思想であり、輓近新カント派の見解は之れを能ふかぎり純粹化をせよとしたものに他ならない。

此立場からすれば論理化するとは先驗的範疇に則つて秩序立つる事と考へられるが、此場合範疇を擔ふ實體の主體といふ如きものは豫想されなことを特色とする。意識一般と言つても何等の意味に於ても心理的主觀に擬へられてはならぬ所の、形式的規範的な範疇一般を指すに他ならない。従て其は感性的意味では勿論、超感性的形而上學の意味に於ても實體であることは出来ない。實體であつてはならないとは他のものとの關係に於てのみ成立することである。論理的に一者は必然に他者を要求する。而して一者と他者との何れにか偏よつて重心を置くことは形而上學に陥る所以であるから、この意味で論理上眼目となるのは一者と他者との *form-*



funktionellな關係である。ラスクの如く論理的なるものは「指示する性質、補充と充實とを欲することを」と特質とすると言ふことが出来る。(H. Lasky, Die Lehre vom Urteil s. 55)

斯く此立場から見れば論理的なるものは常に「充實を欲する」との意味で特殊の「Formartigkeit」を示し、何事も論理的に解せられる場合には funktionell にみられ他の補充を必要とする所の非獨立的な要素となる。論理的に形式化するとは事柄をかゝる非獨立な要素に分解してみるごとゝいふを得よう。かゝる論理的形式化の規則としての範疇はフツセアルの用語を藉りれば「非獨立な對象」Abstraktum であると言はねばならない。範疇に依て形式化されてみられるのは物事の元來の相ではなくそれを funktionell に分割した關係である。形式化の標準となつて居るのはそれ自ら成立する事態ではなく、事柄をかゝる原始的事態に還元する際の方法的規範である。所が論理的眞と偽とは元來經驗的思惟の把握を俟つて成立する規定ではなく、却て主觀的判斷は原始的に眞とし又偽として存立する事態を内に含む限りに於て論理的資格を取得し得るのである。方法的規範はその媒ちをなすに過ぎない。もし論理學が經驗的思惟に對する方法的規範を掲げる事だけを以てその任務を盡すと考ふるならば其れは一つの規範學として結局一種の技術論に墮するものであらう。

又さうでないとしても思惟主觀が一定の規則に従ふといふ事は尙、リッケルトの所謂先驗心理學的事實であつて論理學上第一次的に顧みらるべき事柄に屬さない。何れにしても論理學が飽迄純粹な學として止る爲めには方法的規範ではなく、純粹な論理的價值態を自己の對象とせねばならぬ。かゝる純粹價值態は凡ゆる判斷の基態をなし、判斷の個別的内容を破棄せず其れを取入れながらその論理の意味を闡明ならしめるものである。即ち個々の判斷が眞理自體を含む時は論理上價值あるものとなり、其れが虚偽自體を素材とする時には價值に反するものとなる。従つて論理的なるものゝ對象的妥當の標識たるものは眞理自體、虚偽自體に他ならないで、それ等は普く個々の判斷の基態を成すものなるが故に、決して心理的文法的認識論的凡ゆる意味で分裂せしめ抽象化することを許さない所の具象的統一態である。之れは單に要素と要素との funktionell な關係でなく、要素と要素との吻合から成る獨立的な具象的な對象である。論理上充分な意味で對象的妥當が保障されるには關係形式たる範疇では事足らず、自ら眞とし偽として存立する先驗的事態を前提する要がある。而してこれこそ論理的原始態と稱するに相應しいものである。

先驗的なる認識規則としての範疇も元來かゝる眞理事態、虚偽自體の存立を豫想

しないではその意味を充分に發揮する事が不可能である。先驗的な價值態のそれ自體の存立に依つてのみ、單なる關係形式としての範疇に依る對象の要素化、即ち對象を項と項との關係に歸し、その項を自由に置換へ得るといふ一種の主觀性は脱し得られる。<sup>\*</sup>一範疇に於て抽象的なる對象に到達したものと云ひ得れば更に一步進むで具象的な對象へ溯らねばならない。

\* この意味の範疇の非獨立性は他の機會に於てかなり詳しく述べた。「拙稿貨幣に於ける社會性と歴史性」參照

## E

論理的根本機能としての判断は眞理と虚偽とを判別すると考へられると共に、其は肯定と否定といふ質の區別を持つとされるのが從來の見解である。然し判断の含む價值別と其質的對立とが符合するものでなく、眞理が否定され又、虚偽が肯定されて従て誤謬を生むことがあり、反對に虚偽が否定され眞理が肯定されて正當なる判断が成立する事がある、故に眞理と虚偽、否定と肯定、誤謬と正當とは各々異つた對立の種別である事はラスクが其判断論に於て明確に論じて居る通りである。Vgl

Lehre vom (Lask, urteil s. 12ff.) 元來判斷は其質としては肯定と否定とだけを具有するもので、それに眞と僞との價值性質が附與されるのは判斷の對象たる眞理自體、虚僞自體に係る限りに於てである。眞理と虚僞とは判斷の對象の事であつて、判斷そのものゝ質には與らない。所が判斷を以て抑々論理的機能の基本とするのは其が眞と僞とを判別すると考へられたからであつた。論理的なるものゝ眞髓は眞と僞との分別さるゝ所にある。而して判斷の質は必ずしも眞と僞との對立に對應するものでないとするならば、質の對立をのみ具ふる判斷の内に論理的なるものゝ原始態を求めるのは見當違ひであつて、判斷がそれに與る限り論理的價值性質に係る所の眞理自體、虚僞自體にこそそれは見出されると言はなければならぬ。論理的なるものゝ原始的相は判斷に對して超越的な價值態である。

超越的價值態としての眞理自體、虚僞自體は、假令判斷と同一の言語に表示されても其は却て判斷の對象たるもの、經驗的判斷のボルツァノの意味に於て Stoff, Matière を成す所のものである。判斷はこの意味の質料を含む限り眞僞の對立に與り従て判斷たるの資格を取得する。而してこの超越的な價值態が凡ゆる經驗的な判斷をして對象的妥當性を得しむる關係はかの純粹意識一般の規則に照合する事に依て

對象が可能となる關係に比類する。然しこゝでは最早範疇が經驗的な判斷意識に對して持つ特殊の *Formalität* はみることが出来ない。そればかりではなく範疇内部に於ける形式と内容との分裂といふ單なる構造形式は問題とならない。却て範疇的なるものは直接に眞理自體、虚偽自體として存立して居る。從て眞理自體、虚偽自體は既に非獨立な要素ではない、形式に止り他者を欲するものではない。眞理として虚偽として具象的に成立する事柄である。

\* ラスクも範疇が必ずしも關係的範疇に限らず「存在」とか「妥當」とかいふ様な領域の認めらるべき事を述べて居る (Vgl. *Task, Logik der Philosophie* s. 76ff u. *Lehre vom Urteil* s. 76ff) がこれは既に範疇を所謂超越的論理的に解したもので單なる形式的 *funktionell* に止らず具象的に存立するものと解したものではあるまいか。而して「存在」と「妥當」とに止らないで其等を最高の類とする幾多の具象的範疇を思ひ得ないであらうか。

純粹に論理的なるものはかゝる超越的對象的な價值態である。果してさうだとすれば論理的意味に於て形式化するのは形式論の意味に於ける様に概念の内包と外延との異同に顧みて事柄を數量化し主觀化することではなく、又關係的範疇に置

き直すことでもない。却て事の眞の具象態を明ならしむることであらねばならぬ。事柄を抽象化し形骸化するのではなく、事柄を蔽ふ、事柄そのものに無縁な邪魔ものを取除き、原始的な相を照し出すことが論理的な形式化の機能でなければならぬ。

この意味でラスクの言ふ様に論理的範疇は事柄を明晰化する使命を有つて居る。(Last, *Logik der Philosophie* s. 74ff. s. 182ff.) 論理的現象もこれを原始的に見れば混沌を去て物事の最初にあつた根源的狀態へ還元しようとの道程に他ならない。論理的形式化は生より遠ざける事ではなく寧ろ生への懐れである。論理的に把握されて物は初めて生かされる。論理的とは生の契機である。

論理的なるものゝ原始的相は具象的な價值態である。論理的なるものが生の契機であるといふ事も一に此處に基くのである。然し、論理的原始態の規定を構成する、具象的といふ事と價值的といふ事とは必然的に結合して居らねばならないのであらうか。論理的といふ事は何れの規定に當るものであらうか。生の契機を形作る性質と一致するのであらうか、眞と偽との價值性を持たずして具象的な對象は存し得ないであらうか。そしてそれこそ論理的なるものより一層對象的、具象的であつて、論理的なものは既にそれを價值性質に依て限定したものではなからうか。

私は是等の疑問に顧みて論理的なるものゝ特質たる價值性質を其具象性といふ事實と切離して考察して見度い。

## F

論理的なるものは最初から二元的價值別を具へて居る。形式論理學上言ふ所の判斷の質的差別も原始的價值別の二次的反映と考へ得る。尤もラスクの如く價值そのものは元來對立を絶する一者であつて二元的に考へられるのは既に價值に無縁な主觀性への反省的關係に於てあると言ふ事もできようが (Lasty, *Lehre vom Urteil*, s. 124ff.) 價值たるの特性は論理的たると否とを問はず二元的對立を含む點に最もよく示されて居るといふを得る。リツケルトも價值と實在との區別の標準となり得るものは否定である、實在は之を否定すれば無に歸し否定せられた實在は存し得ないに反し、價值は之を否定するも尙反價值として存立し得ると言ふ。(Vgl. Rickert, *System der Philosophie I*, Bd. s. 117ff.) 否定が價值の特質を示す標準たり得るといふ事は否定を成立せしむる原理が論理上の價值性質を可能ならしめるといふ事である。然らば否定の原理となるのは如何なるものであるか。

元來否定判斷の意味は同一事項の同一關係に就て成立する肯定判斷に矛盾するといふ點に存在する。同一内容の肯定判斷と兩立しないと同時に兩者何れも成立し得ないといふことのあり得ない所に否定判斷の意義がある。この否定判斷を可能ならしむる原理はアリストテレスの所謂「同一事が同一の關係に於て同一のものに歸屬し同時に歸屬しない」といふことは不可能である」この矛盾の原理であり、更に「否定の否定は肯定である」この二重否定の原理である。「排中の原理」を以て前二者の原理から當然歸結する事項を要約したものと解するとすれば、否定は結局排中の原理に依り成立し逆に排中の原理は否定の原理であると言ふことが出来る。(Vgl. Sigwart Logik I. Bd. S. 23ff.) 嚴密には否定判斷が成立して初めて肯定判斷の意義も生ずると解し得られるのであるから、論理的なるものは中間に何ものゝ介入をも許さない所の二元的關係に依て可能となると考へ得る。既に形式論理の境に於ても否定判斷を打樹てる爲めには贅辭となる概念の全範圍を知るを要すとして肯定判斷に比し判斷としての値の勝れるものとして居る。かく否定判斷に依て論理的なるものゝ本質が明瞭化される所以は否定判斷が矛盾の原理從ては排中の原理を體現して居るものに他ならないからである。否定の原理たる排中の原理こそ論理的な



るものゝ根本原理といふを得る。

\* 矛盾の原理の内容は必ずしも人により一様でなくアリストテレスは二個の判断相互の關係と解するに反しライプニッツ、カントは之を一判断の主位概念と賓位概念との關係と解しようとする。然し後者の解釋も結局前者の如く二個の判断の相互關係と考へ得る事はシグワルトの述ぶる如くである。  
(Logic: I, Bd. s. 198ff.)

否定と肯定といふ如き判断領域の質的對立を超越する所の眞理と非眞理の對立も亦排中の原理に支配さるゝに至て初めて論理的な價值對立となる。眞理と非眞理或は虚偽の間には何等の關係も成立する餘地がない。兩者は程度の差に依て相連するものではない。眞理に矛盾的に對立するものが虚偽である。虚偽を再び偽とすれば其は眞となるが故に眞と偽との間に立つ價值關係は存しない。判断領域に於て否定の原理と解された排中の原理は素と價值の原理たるものである。價值はこの原理に基いて立つ。従て論理的原始態としての眞理自體と虚偽自體は價值性を帯びた命題自體として、命題自體そのものではない。

斯く論理的なるものを價值態とみれば、論理的に形式化することは價值的に對立さ

せてみる事、即ち排中の原理に服する事を意味する。故にもし價值的に制約されない命題自體が存し得るとすれば、論理的なるもの、他面の特質である所の對象的具象性、具象性の力といふ事は必ずしも論理的なるもの、のみ附屬する性質ではなく、論理的なるものはその一つの範例に過ぎないやうな一層普遍的なる關係に従屬するものであつて、論理的なるもの、特性は寧ろ價値性といふことにあると斷言し得る。而してかゝる價値性に拘らない所の命題自體は存立し得る。

一般に立言は實在するものに就てのみ成立つに止るものでないことは數學の命題の示す通りである。例へば幾何學上の圖形に就ては實在を主張する事は出來ないがその圖形の性質に就て立言することは可能である。性質狀態等は單なる實在ではなく、かくくの姿態をとるといふことに過ぎない。之れはマイノングに従つて *Soscin* と呼ぶ事が出來る。而してこの *Soscin* は言はゞその支持者である所のもの、實在すると又數學上の事柄の如く非實在的ではあるが尙存立する (*Bestehen*) とを問はず、それとは獨立に、從て素々無時間的に打樹て得るものである。マイノングは之を *Soscin* の獨立の原理と呼びて居る。(A. Meinong, *Über Gegenstandstheorie im „Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie“* s. 8) *Soscin* を有するものは實在し或

は非實在的に存立することをも必要としない。經驗的に實在し得い所の「黄金の山」更に實在的に相容れない性質を具備する所の「有情の石」更に非實在的で而も存立性をも持たない所の「圓い四角形」といふ如き對象も *Sosein* を有し得る。黄金の山は黄金であり、有情の石は情を有ち、圓い四角は圓く而して四角い。其等の所謂不可能な對象も對象である故に對象は元來、實在及存立を合せ含む意味での廣義の存在に關係のないもの *Aussersein* である。(Vgl. Meinong, *Ibidem* s. 9ff.) 従つて其等の *Sosein* に就て立言する命題も亦價値に拘らない。其はその立言する事柄の眞偽に拘らず成立する。 *Sosein* の主張は對象の姿態に關するものでその存在非存在從て價値性に關するものではない。非存在に對立すると考へられた存在といふことは價値に他ならない。實在も共に價値である。然るに *Sosein* はそれらの存在、即ち價値から獨立である。從て *Sosein* を内容とする所の命題自體は價値に係る事を以て要件としない。

\* 不可能な對象に就ては Meinong's *Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften* §. 3 を参照。更に其種々相に就ては O. Hazy, *Die Struktur des logischen Gegenstandes* I. Teil, 5. Kap. に詳し。

右の通、命題自體にして價値性の措定を含まないものが存し得るばかりでなく、價

値の定立は命題自體の成立に不可缺な要件でもない。眞と偽との斷定を徑ずして存する命題自體も其具象性に於て價值的なそれと少しも變る所がない。單なる「表象」として或は概念としての非獨立性を脱し端的な事態として存立する事は價值的たる否とは關しない。却て論理的なる命題は價値の原理を以て端的な事態を限定したものと考へ得る。從て論理的原始態としての具象的價値態に於て本來的に論理的と考へられる規定は具象的ではなく價値的であると言ひ得る。論理的形式化は具象態を明ならしめようとの手續には相違ないが、その内特に論理的と稱し得べきものは排中の原理に基く價値關係的觀方である。この意味に於ける論理的形式化と論理的原始態を明ならしむる過程をも其一つとして含む所の、對象的に具象的なるものを明瞭化しようとの手續一般とは嚴に區別しなければならぬ。この後の手續こそ私が「形式化」に對して「普遍化」と呼ぼうと思ふ當のものである。用語はフツセアルのそれに從つたのであるが、意の存する所をよりあからさまに表せば「對象的具象化」とも呼ぶべきであらう。唯暫く便宜上の意味で「普遍化」と稱することゝする。左に私はこの普遍化に就て考察しようとするのであるがその手續そのものを述べる以前に對象的具象態そのものを一層深く究め度いと思ふ。

第二部 普遍化

A

論理的原始態はポルツァノの謂ふ「命題自體」の如く對象的にして而も具象的存立である。而もそれが特に論理的である爲めには眞理自體虚偽自體といふ如き價值的對立を含むで居らねばならない。けれども價值的對立を持つといふ事は論理的、命題自體に限らるゝ特性であつて命題自體一般に通ずる性質ではあり得ない。其自身價値に無關係なる事を屬性とする對象性が存し得るといふ事は價値に縁のない命題自體の定立され得ることである。かゝる命題自體の存立を前提しないでは如何なる對象も考へ得ないからである。マイノングが對象そのものは實在に對しても存立に對しても其埒外に在ると述べるのは對象が價値性を具ふる事を要件としない意味であらう。斯く價値に無縁な命題自體が存し得るばかりでなく、實は一切の論理的命題もその價値性を中和して排中の原理の支配しない領域に於て見る事ができるのであるまいか。そして中和された命題自體の方が一層具象的であるのではなからうか。

最初に注意して置かなければならないのは命題自體を以て具象的と稱する意味である。命題自體は實在する對象が持つと通常考へられる所の意味に於ては具象性を有つものではない。といふのは先もし實在するといふことを感性的作用を及ぼすといふ風に取るとすれば、感性的であるものが性質的に規定されるには何等かの意味で形式化されねばならない。單にかゝる性質の基態と考へられる感覺といふ如きものは却て最も不明瞭な混沌である。命題自體はかゝる混沌であることは出來ない、それ自體他のものゝ助をも要せず明白なる所にその獨立性が存するからである。感覺は命題自體に形式化されて初めて具象的になるのであつて、命題自體の具象性が感覺に基づくのではない。更に實在といふ事を一つの論理的範疇と解するならば其は一種の價值附けである。價值附けが命題自體の具象性の構成に與らない事は下に述べようとする所である。命題自體は自ら實在すると規定され得ないと共に其内容も實在を措定するものとは限らない。命題自體は單に感性的なるものゝやうに非獨立な要素ではなく要素と要素との結合に依て成る具象態である。而もどのやうな意味に於ても既に價值づけられた對象ではない。

尤も命題自體は所謂表象の對象のやうに項を一つしかもたないもの (singlicding)

ではなく、いつも二つ以上の項を持つて居る。(Mehrgliedig) 故に言語で之を表すとしても單なる名辭を以ては足らず文章を以てしなければならぬ。而して文章にも否定と肯定といふある意味の質的區別が示される様に命題自體に於ても項と項とが關係する時二つの相反する性質が考へられる。かゝる質的差別を具ふる點に於ては一見論理的對象と等しいかの如く思はれる。確に論理的對象も亦特殊の命題自體である。ではあるが命題自體一般は價値の原理である所の排中の原理に依て支配さるゝ事を要しない。命題自體一般に示さるゝ一方の質と其の反極をなす質との間は無限の階段を以て連續して居る。相反する兩極はかゝる連續の限界に過ぎない。その中間の何れの點も兩極への方向を含むで居る。従てこの場合には反對の極端は嚴格な意味に於ける肯定と否定との矛盾關係に立つものではない。其處に支配するのは排斥の原理ではなく、却てかゝる價値の根據を問はない所の中性の原理である。

茲に中和性の原理といふのはフツセルアルの所謂中和性の變様 (Neutralitätsmodifikation) に相當するものである。フツセルアルに従へば一般に意識に取つて二つの態度が本質的に可能である。一は措定的であり、他は中和的である。措定的意識と

は存在を價值あるものとして打ち樹てる態度であつて、作用の側に所信 (Glaub., Do-  
 ks) 對象の側に存在 (Sein) が考へられる。この際、各々の側に相ひ應する幾組かの  
 態様が見出される。即ち存在が或は確實な所信を以て、或は蓋然的、或は可能的に措  
 定されるといふ時、確實性蓋然性可能性などがそれである。肯定と否定も亦他の方  
 向に於ける所信と存在との態様に他ならない。所がかやうに措定的意識だけに限  
 られる特殊の態様ではなく、廣く如何なる意識にも行き亘る所の變様がある。中  
 性の變様が是である。この變様を経た意識は一般に理性の權利に従はないことを  
 特色とする。そこでは理性非理性に就て尋ねることは意味がない。言ひ換へれば  
 措定的意識は價值の原理に服する境であるが、中和的意識は其の支配を無力にし、妥  
 當不妥當・正當不正當に就て何事も思ひ設けることをせず、唯、それに拘りなく思ひ浮  
 べる」ことをするだけである。而して措定性と中和性との區別は意識の一般的區別  
 であるから、措定性の存する所之れに對應する中和性の考へ得ない事はない。兩者  
 は必ず形と影の如く相ひ伴ふものである。措定的意識の打ち樹つる程のものは漏  
 れなく中和化して寫し取ることが出来る。(これらの點に就ては Vgl. Ideen, § 109ff.)

元來、かゝる中和性の意識の可能なる事に、純粹現象學は自らの立場の可能の根據



を持つものである。かの現象學的判斷中止と言ひ、現象學的還元と稱するものはこの中和された意識に基くものに他ならない。何等か實在を措定してそれを準據して理性・非理性を問ふ所の價值的態度をとる「自然主義的」立場に對して、その措定の働きを別な價値視點から否定するのではなく、唯、措定の價值的力を消去し、對象の存在性を控除して、新たな立場に移す所に現象學的方法の特質がある。(Vgl. Ideen, § 31) かやうな還元の結果として「純粹」或は「先驗的」意識といふ「Urregion」への展望が開れ、一切の世界がこの意識に括り込まれ、それに依つて符號を變せられて意味の世界と化し特殊の連繫を形ち作ることになる。即ち中和化に依つて顯になる純粹意識は價値の原理としての矛盾律・排中律に従ふことなく、然も凡ゆる實在界存在界を包容し、それに位置を供し意味を賦點しその全體的連繫を明にするものである。この意味に於て中和性を原理とする純粹意識は一切存在界の可能を保障する根元となる。そは自らは存在するものではないに拘らず却てそれが故に、存在するもの、價値に關はるものゝ根基であるとの意味で、一切存在の基礎づけをなすといふ先驗的に深き意義を擔へるプラトンの所謂「Hypothese」の意を語るものでなくて何んであらう。措定の働きの價值的力を中和し一切の存在の偏頗な存在性を取り除くことに依つ

て却てそれに新たな意味と連繋とを賦與する所のフツセアルの純粹意識をかく解することは許され得ないであらうか。もしさうすることが肯れるなればその純粹意識がコオヘンの所謂「可能性の判断」の範疇としての「意識」に通ずるものがあることを思はないわけにゆかない。<sup>\*</sup> (Vgl. H. Cohen, *Logik, der reinen Erkenntnis*, IV. Klasse, I. Urteil)

\* この見解が必ずしも不當な私見に止らないといふ事はナアトルブも亦フツセアルの所説を批評せる論文中に於て大略次の意味の事を述べて居るのでも察し得られる。即ち、意味を賦與する意識は、措定的思惟に依つて勝手に限界を劃され分立的に措定されたものを、それらがそこから發した所の根原的な連續性へ戻すものであり、又個々の思惟措定が純粹意識といふ直接な「根據」を要求する事は取も直さずコオヘンの「根原」を要求するに他ならない、と。

(Vgl. P. Natorp, *Husserls „Ideen etc.“ in „Logos“*, Bd. VII, s. 231)

尤もマアルブツク氏の思想とフツセアルのそれとの近接はナアトルブの「一般心理學」に於て著しく高められて居るに拘らず、その相違特に純粹意識の見解に就ての違ひが、フツセアルの「還元」とナアトルブの唱ふる「再構成」の方法との違ひの内に示されて居る事はナアトルブ自ら明言する通りである。

(Vgl. Ibidem s. 236)

かくて中和性の原理に従ふ事は純粹意識に立ち戻ることであり延ひては又特殊の意味に於ける「可能性の原理」に服する事である。之れに依つて全ての対象は意味と化し、矛盾的に對立せるものも連續を形ち作るやうになる。

私は次にかゝる中和的な可能界に於て対象が取る状態を究め度いと思ふ。既に事柄の具象的原始態は單なる項や要素に止るを得ず、何等か命題の形に於て表されねばならぬものであつた。然もかやうな命題自體は今や價値の原理の支配を脱することになるのであるから、何れも矛盾的に對立するものが存する筈なく、互に脈絡あるものでなくてはならない。かやうな命題自體の連續的集合は如何なる構造に於て示されるのであらうか。私はこの點に就てマイノングの提唱する對象論の分析を辿ることに依つてもう一度、事の最初から見直そうと考へる。

この場合、重要なのはマイノングもフツセアルの中和性の意識に類する假定の意識を認むることである。其れはマイノングに據れば表象と判斷との中間に存する第三の作用であつて、質的差別を持つ點で判斷に類し表象と異なるが、信念を缺く點に於て表象に近く判斷と分たれるものである。従て信念を缺き對象を思ひ浮べるに

過ぎない所のフツセアルの中和性の意識と同視されるやうであるか、この假定とフツセアルの所謂中和性の變様とを直ちに相即することは異論がある。フツセアル自らもマイノングの假定を以て措定的意識に特有な態様の一つに屬するものである、假定することも亦措定する一つの貌であるとし、意識の全般に及ぶ中和性の變様と混同してはならないと明言して居る。(Vgl. Ideen, § 110) マイノングは確に表象や判断と相並ぶ心理的一作用としての假定を説くに止つて未だ先驗的變様に思ひ至らなかつた事は事實であるか、次に述べるであらうやうに假定の意識とその對象との關係を述べる點に於て中和性の意識に於ける對象の性質を究むる際に教へられる多くのものを持つ事を否むことは出來ない。故に次に中和性の變様を経たる對象の性質をみるに當つて、マイノングの假定を右の中和化の變様、現象學的還元、更に「可能性の判断」に迄醇化させた意味に於て解し度いと思ふ。<sup>\*</sup>

\* これらの點に就ては務臺理作「意識の變様に就て」思想第四十二號に詳しい。

## B

マイノングは全々意識は何ものかの意識であるとの見地から各々の作用に就て

各特別の對象を立て所謂知的作用の中でも表象の對象と判断のそれとを區別し前者を „Objekt“ 後者を „Objektiv“ と稱して居る。<sup>\*</sup> この Objektiv は我々の謂ふ論理的命題 Objekt はボルツァノの所謂表象自體といふ如きものに相當するのであるが、マインングは前述の如く判断と表象との間に第三の作用を認めて居る。かゝる第三の作用に依て指定されるものはいつも假定 (Annahme) の形を取る。而して判断の對象のみならず Annahme も亦 Objektiv であるを主張される。(Vgl. Meinong, Über Annahmen) 私はこの Annahme を前節に限定した意味に解しその對象としての Objektivこそ價值原理に拘束されない所の命題自體一般であると考へるものであるが、先づ作用的側面の事實を少しも顧みず、尙價值性の有無といふ事を問題の外に置いて絶對象として考へられた Objekt を Objektiv との相互關係を検べてみよう。

\* Objekt を Objektiv との區別に就てはマインングの後期の殆んど全ての主要なる論文に載つて居るが、此用語を初めて使用したのは „Über Annahmen“ 第一版一九〇一年である。(Vgl. Meinong, Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften 1907 s. 20. Anmerk.)

純對象的に考へられた Objekt を Objektiv とは恰も部分と全體との關係に立つ。<sup>\*</sup>

Objekt は Objektiv の内に包含されて居ると共に、其構成成分となつて居る。例へば A は B であるといふ判断に於て、A はそれに就て判断される対象として含まるゝ所の Objekt であり「A は B である」といふ判断事項は判断そのものの対象として Objektiv である。これを別の方面から見れば判断或は Annahme はある意味で二つの対象を持つて居り、常にその一つは他の対象の部分であると言ふことが出来る。(Meinong, über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens, s. 19) 一般に部分と全體との關係は対象それ自身に根ざす形式的關係をしてフツセアルの所謂 formal-ontologisch な研究を必要とするものであるが (Vgl. Log. Unters. II, Bd. s. 225ff) 私は特に Objekt と Objektiv との關係に就てこれを究め Objektiv 従つて命題自體一般の本質を明にするに資し度い。

\* Vgl. Meinong, „Über Gegenstandstheorie“ in der „Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie“ s. 10ff.

Objekt が Objektiv の内に構成成分として含まれるといふ事も種々の意味に取ることが出来る。先づ前者なくしては後者は成立し得ないといふ事に解釋するとして、其は擴がりなくしては色を表象し得ないといふ關係と等しいのであらうか。然し色自身は擴がりなくしても存立し得る、色の表象が擴がりの表象を前提するに過ぎな

い。色といふ対象そのものに取つては其表象の非獨立性は外面的偶然的に過ぎない。然るに Objekt と Objektiv との關係はかやうな外面的のものによらず、対象の内面的屬性を示すものに他ならない。所でかゝる内面的依屬性を最も手近に表示する例は、相違とか相等とかいふ關係に求められる。そして此處に關係と謂ふのは例へば「AはBと異なる」といふ様な Objektiv ではなくAとBとの「相違」といふ Objekt である。アメゼデルに從て前者を「Relation」と稱すれば後者は「Relat」と呼ばれ得る。(Vgl. R. Ameseder, Beiträge zur Grundlegung der Gegenstandstheorie, in der «Untersuchungen zur Gegenstandstheorie u. Psych.», s. 72) 、「の意味に於ける Relat の内面的非獨立性の特質を最初に顧み度い。

## C

Objekt としての Relat は關係に立入る項としての Objekte を前提しないでは成立し得ない。前者は後者の上には言はば築き上げられて居るのである。兩者はこの意味で内面的に依屬し合つて居る。マインングは此意を示すべく土臺となる對象に對して其上に築き上げられた對象を「高次の對象」と稱して居る。或は特に相對的

に前者を *Inferiora* 後者を *Superius* とも呼んで居る。 *Superius* は又觀念的對象としてかゝる對象に相應する知覺たる „Fundierung“ といふ作用方面から規定されて *Fundierungsgegenstand* 或は *der fundierte Gegenstand* と呼ばれて居る。 (*Vgl. Meinong*) *Gesammelte Abhandlungen* II, Bd. s. 386, auch s. 399) 前に擧げた相違といふ様な *Objekt* は高次の對象の著しい例である。然し高次の對象となり得る *Objekt* は *Relat* だけでは限らない。關係はそれを築き上げる土臺と寄り合つて又一つの對象を形作ると考へられる。例へばメロデーは單なる音の集合ではない。一々の音と音との間に一定の關係が附加されて、一々の音と關係との上に新しい對象が生じるのである。この新しい對象は „Komplex“ と名付けられ得べき一つの *Objekt* である。赤い圓とか緑の四角などいふ對象も亦かゝる *Komplex* の例である。而して一定の *Komplex* が成立する爲めには單なる項を全體の成分に化する所の契機として一定の *Relat* が存する事が必要である。従て *Komplex* の成立する所には必ず *Relat* を伴ふものである。逆に項と項とが一定の *Relat* を成すといふ事は更に各々の項と *Relat* とが並立して居るといふのではなく、各々の項は其 *Relat* の故に一つの全體を構成するに至る事を示すに他ならないのであつて *Relat* が成立する所には必ず又 *Komplex* を伴ふといふ



事が出来る。斯く兩者は必ず相伴する。マイノングは之を關係複合相伴の原理と呼びて居る。<sup>\*</sup>私は是等二つの對象は高次の對象としての *Objekt* が土臺となるそれ等と成す所の内面的依屬關係を異つた見地から明にするものに他ならないと考へる。高次の對象は一方項と項との間に成立し項それ自らに附著するものではないと共に関を離れて獨立し得るものではない。關係は前の事情を複合は後の性質を表して居る。従て項と項とは全體としての複合を構成すると言つても關係を離れた項其自身の規定に基いて全體を成すのではなく、關係に立入る限の項としてゝあつて従て他の項と入替へ得べき性質を擔つて居る。メロデイと言つても *Objekt* としてのメロデイは一定の音を土臺とするの要がない、凡ゆる對象に就て例へば色を土臺としても成立し得る。赤い圓といふ複合にしてもかゝる *Objekt* は色と擴がりどを項とするを要しない。メロデイを眞に音の一定メロデイたらしめ赤い圓を色と擴がりどの一定の複合とする契機は *Objekt* そのものには存しない。詳言すれば項としての *Objekt* を土臺として更に高次の *Objekt* を見るといふ仕方では項と項とを繋ぎ合せることは出来ず、項を全體の構成分と見ることは不可能である。新に築かれる對象は土臺となつて居る對象と並立して居るだけで決して其等を合せた

全體を成すものではない。個々の音を而して更にメロディであつて、個々の音がメロディを成すのではない。赤と圓と而して赤い圓であつて、前者が融合して後者が生ずるのではない。ObjektとしてのKomplexは個々の音と相並ぶメロディであり赤と圓と相並ぶ赤い圓に他ならない。Relatを相並むで考へられるKomplexはかやうな意味を持つに止ると信ずる。

\* マイノングは最初にこの原理を „Über Gegenstände höheren Ordnung und deren Verhältniss zur inneren Wahrnehmung in der“ Gesammelte Abhand II Bd. s. 389ff 中に揚げて居るがその謂ふ所がObjektに就てかObjektivに就てか甚だ曖昧である。私は先之をObjektに就ての立言と解して見た。後斯の原理はErnst Mallyに依つて一層詳しく限定された。其處では明にObjektivのみならずObjektに就ても此關係の成立を認めて居る。(Untersuchungen zur Gegenstands th. u. Psych. s. 153ff) 然もObjektとして考へられた高次の對象は土臺となる項に對して非獨立的である。この必然性が存する故に各々の項はFundamenteと稱されるのである。(Vgl. Meinong, Gesamm. Abhand II. Bd. Zusatzze zur Abhand. IV. von A. Fischer Nr. 40.) 然しこの對象性そのものゝ性質である所の必然的非獨立性は、高次の對象の把握に就ての作用的非獨立

性とは異なる。マイノングに據れば項となる個々の對象に對して知覺がとると同様の地位を占める把握作用として、*Fundierung* “といふことが考へられ、この仕方に依つて高次の従つて必然的に觀念的な對象は土臺となる實在的對象と同一の原始さに於て表象し得るのであるが、其際必ず土臺となつて居る對象の表象が前提されねばならぬと言はれる。<sup>\*</sup>この場合前提されるといふ事實はマイノングが「心理的前提」と稱する所のもの (Vgl. z. B. *Über emotionale Präsentation* § 8) であるが、其必然性そのものは單に心理的事實に妥當するに限らず論理の意味を有するものであるとしても (Ibid. s. 72) 其處に考察されて居るのは「心理的」即ち作用的事柄であつて對象の先驗的性質には屬さない。故に土臺となる對象が *Fundament* と呼ばれる意味は作用としての *Fundierung* の前提となるといふ意味ではなく、對象そのものゝ性質として論理的必然さに於て高次の對象が其等を豫定するといふ事を指すのでなければならぬ。關係は常に項と項との關係であり複合はいつも項と項と而してその關係との複合である。

\* マイノングが言はゞ高次の知覺として *Fundierung* を認めることは狹義の知覺從て其對象しか見得ず他の半面を無視して居た所の從來の觀方に對して

確にフツセアルの高次の直観としての *Kategoriale Anschauung* に通ずる所ある重要な見解であるが、此處にはその重要性は直接關係がない。

斯く *Objekt* としての高次の對象は一方に項を *Fundamente* として前提しその意味に於て非獨立的依屬的でありながら同時に他方唯だ項と並立するのみで項を全體に繋ぎ合すことは出來得ないものである。この意味に於て二重に抽象的である。*Objektiv* の部分たる *Objekt* として而して又更に特殊の *Objektie* の上に築れたるものとして。項としての *Objekte* と高次の對象としての *Objekt* との非獨立的關係は非獨立なるものの内部に於て獨立の度の低いものがより獨立なるものへの關係である。一方 *Objektiv* も亦部分としての *Objekt* にある意味で依屬して居るといふことが出来るが其は獨立的なるものが非獨立的なるものへの關係である。故に *Objektiv* は高次の *Objekt* の様にその構成分に對して抽象的であるとは稱し得ない。項としての *Objekte* とその上に築かれた *Objekt* とは確に内面的依屬性を示し、色と擴がりとの如く唯外面的に係り合ふに止るものではないが、その具有する内面的依屬性は *Objektiv* と *Objekt* との間に存するものとは別種のものである。私は進むで後の關係の特質を究めよう。

D

翻て考へてみるのにマイノングが相伴の原理と稱する所のものは之を嚴密に解するならば Objektとしての Relat と Komplex とに對して成立するのではない。Komplex は項がそれ故に一定の配置を得る所の Relation を必要とするとしても Relat は之を要しない。後者は唯暗に伴ひ得るに止る。Relat は項とはなるが項を繋ぐ力を持ち得ない。であるから Relat だけでは Komplex は打立てられない。又他面項と項とを秩序づける Relation が存する場合判然之に同伴するのはその Relation に依つて組立てられた Komplexion であつて、Relation に依つて支配されるべき Komplex ではない。Objekt としての Relat と Komplex とはどうしても項としての運命を脱する事ができない。部分であつて全體とは成り得ない。

對象が單なる項としての孤獨を脱し全體に於けるその位置を取得する爲めには必然 Objekt とかゝり合はねばならない。素 Objekt は Objektiv の部分としてその内に配置されて初めて其意味を得來るものである。Relat や Komplex に就てもそれを意味あらしめ生かす所のものはそれ等の基となる Objektiv とそれ等を等分

に項とする所の *Objektiv* としての *Relation* であり *Komplexion* である。A と B とは異なるといふ關係を示す *Objektiv* があつて初めて A と B とそして「相違」といふ *Objekte* も獨立し得るのである。一定の *Objektiv* から全く切離された A や B やそして相違は單に抽象的な非獨立な對象に過ぎない。極言すれば單なる符牒であるに止る。名目に實質を與へ非獨立なものに獨立性を與へ、言はゞ死せるものに生を吹込むものは *Objektiv* である。メロデイはこれに依つて眞のメロデイとなり、赤い圓はこれに依つて赤い色を持つた圓、圓い擴がりの上の赤となる。

然し是等の事は第一部に於て知られた事柄以上の何ものをも含むでは居ない。かの純粹なる論理的原始態は右の *Objektiv* としての性質を具備して缺くる所のない價值的命題自體であつた。私の問題はかゝる論理的原始態と *Objektiv* 一般とを相即してよいか否かに存した。論理的命題自體は價値の原理たる排中律に依つて支配されて居る。然し *Objektiv* は常にそれに拘る必要があるのか。それとも價値關係的といふことは單に論理的對象に就てのみ制約となるのではないのか。成程論理的對象が十全に成立するには價值的なることを要するとしても對象一般を生かすにはかゝる修飾を経ない *Objektiv* で事足りるのではないか。

元來論理的對象は既に *Objektiv* をその部分として含むと考へられる。といふのは論理的價値に係らしめらるるのは單なる *Objekt* ではなく *Objektiv* であるからである。非獨立にして抽象的、未だその内容の限定されて居ない對象に就てその眞僞を斷定することは無意味である。假令一見言葉の上では單なる *Objekt* に就て眞僞が判せられるやうに思はれる場合でも、その主格は何等かの *Objektiv* に展開され得るもの、唯その *Objektiv* の略號としてのみ用ひられたものとするのでなければ論理的判斷は成立し得ない。意味の不定なるものに就て眞僞を云爲する事は論理そのものに矛盾する。それは論理的に不可能である。従て論理的對象が成立するには既に *Objektiv* が存立して居らねばならない。例へば「AはBである」といふ *Objektiv* が眞であり或は僞であるのであつて直ちにAが眞であり僞であるのではない。然も「AはBである」は直接には眞理自體でも虚僞自體でもない、それが價値の原理に照して判定されて初めてさう分れるのである。論理的對象は既に *Objektiv* に就ての判斷の結果であるとの意味でその中に *Objektiv* を包含して居る。この關係はさう解さるべきなのであらうか。

先丁度 *Objektiv* が *Objekt* をその部分として含むと同じく論理的命題は價値に無

記な Objektiv を其部分として含むことに依つて部分たる Objektiv の意味を一層明にし、それに益々生命を吹込むのではないかと想像される。そればかりではなく元來論理的命題が含む所の Objektiv が成立しそれが Objektiv を生かすと考へられるのも一に論理的契機がその中に秘むで居るからである、A と B とが相屬され或は疎隔される時、もう論理的なる價值契機が豫想される。自同の原理に従て相屬され、矛盾の原理に則つて疎隔されるのでなくて他に途があるかと疑はれるのである。がかゝる思想を無雜作に受取つて差支へないのであらうか。

矛盾の原理は排中の原理の半面として論理の原理であるには相違ないが、それは判断と判断との關係を支配するものであつて一つの判断の内部に於ける名辭(或は概念)と名辭との關係と解するには其名辭を判断(或は命題)に分解して考へ直すことが必要であることは既に述べた通である。果してさうであるとすれば論理的關係が明確に成立するには既に二つの Objektiv が成立して居らねばならない。この二つの Objektiv が價値に係らしめられて矛盾すると言はれるのである。故にこの意味からしても論理的命題は既に Objektiv の存立を前提して居る。

更に Objektiv が Objektiv の「意味を明にする」とか「生かす」とかいふ事を以て私が言ひ



表さうとして居る事柄を明にしなければならぬ。それはある價值に照して眞僞を判定し、そこに眞として定立された内容を漸次に豊富にすることを謂ふのではない。個別科學は、ある認識目的を掲げそれを標準として世界を自己の内容と化すことに努め、その意味は内容の増加と共に次第に判然たるものである。反之論理的形式化はある一つの見地からする眞理に囚れることなく、見地を越えて各々の價值判定に拘らない所の原始的價值態を求める。眞理自體、虚偽自體は個別科學の内容的眞僞に拘らない所の原始的價值態である。斯く論理的形式化は個別科學の事とする價值判斷の一々に煩されはしないが、その價值的態度だけは之を取り來つて價值の原理を打樹てるのである。従つて一方原始態を求むる方向を持つと共に價值の原理を携へて居る。これは個別科學の論理としては已むを得ないとしても、個別科學の見地と截然區劃され、虚心に言はゞ神の心となつて萬象の原始態を見ようとする哲學の論理<sup>\*</sup>に取つては未だ偏見たるを免れないのではなからうか。個別科學の世界が價值判斷の世界であるとすれば哲學の世界はある意味に於て虚無の世界である。かやうな意味で原始態を求め原始態に取入れられて生き、意味を明確にするといふことと眞理としての内容を豊富にするといふ意味に於ける意味の限定とは全く別

個のものである。論理的形式化が途中で原始態を求むる態度を止めて價値の原理を以て自己を制限するのは哲學的には不徹底であり、個別科學への依估である。論理的命題がその含む所の *Objektiv* を真或は偽として斷定するのは未だ決して原始態を明ならしむる所以でなく、個別科學の態度から一步も踏出せるものでないと考えられる。それは *Objektiv* が *Objekt* を生かすといふと同様の意味ではその含む *Objektiv* を生かすとは言ふ事が出來ず *Objektiv* が *Objekt* を部分とすると等しい關係では *Objektiv* を部分と見做し得るものではない。

\* ラスクが同様の名稱を以て意味して居るものと内容を異にして居るのは勿論である。

故に何れにしても論理的對象は窮極の對象と稱することは出來ない。論理的對象にも増して原始的なる對象而も具象的なる對象が存せねばならぬと考へられる。論理的契機は私が從來求め來つた意味での具象性を強めるものではなく却て制限するものである。論理的なるものを以て價値的なる事の特徴とする考へれば、事柄の原始態を求むる目的に對しては中途半端に止り、又論理的なるものを以て元來事象の原始態を明ならしむるものとすれば價値的といふことがそれを妨げる。兎

に角價値の原理は事柄の原始的具象態を究むるには縁のないものとされねばならない。果してさうだとして價値に拘らない所の原始態としての *Objektiv* は如何なる性質を持つて居るか、そしてそれを支配する原理は如何なるものであるのか。次にこの檢索に移らう。

## E

價値關係を離れた原始的な *Objektive* は最早價値的對立言ひ換へれば相互に矛盾し中間領域を許さないやうな間柄に立つものではない。それは價値的措定を含む *Seinsobjektiv* ではなく、一切の存在から獨立な *Socinsobjektiv* である。それらは相互に弧立し全く無關係に割據するものではない。中和性の意識に取り入れられ、意味の連續性を形作り、ごの一を取つても他のものに矛盾するものは存しない。前に哲學の世界は虚無の世界であると形容したが寧ろ恩寵の彌漫した世界に譬ふべきなのであらう。價値を以て矛盾の原理に支配さるゝものと解したればこそ非價値といふ點を強調する爲め虚無と斷じたのであるが、ごちらかと言へば何ものも「價値」「光」に朝しないもののない世界である。對立のなき故に價値が考へられず、闇なきが故に

光に浴する事の覺れざる境地である。何れを取つても相矛盾するものはなく、どの一つも他のものへの關係を含むで居る。ある一つを點基としてみれば他のあるものはその反極と考へられるであらう。けれどもそれも度合が極端に稀薄だといふに過ぎない。どんなに微かにでも最初のものへの傾向を残して居る。然もこれを積極とし、それを負極とするかは決せられて居ない。この境では積極と負極を持つといふ二元的方面が重要視されるのではなく、一から他へ移りゆく可能的連續性といふ事が要點と考へられる。兩極は連續的可能態の持つ二つの方向を指すに過ぎない。而も二つの極は價值即ち特に論理的範圍では眞偽とは考へ得ず、價值の原理に支配されない所の價值態の影像としての事實性及非事實性といふ如きものである。それは如何なる名稱に依つて呼ばれるとしても可能態の連續の兩端といふ以外の何ものをも意味するものではない。論理的命題は前の原始的 Objektiv は各々かゝる可能的關係に於て連續をなし、複合を形作るものである。元來 Objektiv が Objekt を生かし獨立化することが出来るのも各々の Objektiv がかゝる可能性の原理の下に支配されて居り、一々が各々の通ずるとの意味で事柄の全體の姿を宿して居るからである。これは純粹なる Sosein の世界である。そこに生ずる Objektiv は

Sein の判定に拘りなく、*Sosein* そのものゝ規定を語るものに他ならなう。*Sosein* を限定する異質的なるものは何も見出されない。個々の *Sosein*objektiv は全體の *Sosein* の局限されたものに過ず、常に他の *Sosein*objektiv に隣する而も一の限界は他の限界へと無限に押し移される事が出来る。かくて一切の對象がその局限性を脱して稠密にして完全なる集合を形作るに至る。この事情は假りに色の集合に譬へる事が出来る。個々の色はこれを物理學的に事物化さず、それ自體にみれば色の連續的全體を豫想しないでは具象的に存し得ない、それは連續體の切斷としてのみ十全の意味を發揮する。然も色調に就て、飽度に就て、明暗に就て、各々の系列が考へられ、一々の見地の下に一定の連續が存立し得るのである。可能界に於ける事實性と非事實性は例へば色の集合に於ける明と暗、色調の兩極の如きものに過ぎない。何れを正と見何れを負と見るも任意である、而して斯の如き特色を有する *Objektiv* の集合に就て其處に成立する可能なる連續的系列の形式的合則性を究むる事は取りも直さずフツセアルが純粹論理學の窮極の理想とする所の純粹集合論を實現する所以であると考へられる。可能なる理説而して可能なる對象領域の原理的な形式と法則的關係とが究められ、現實の理説、個々の認識領域はその特殊化と見做され得る。\*

## \* 前述第一部 C 節を参照。

右の通り *Objektiv* が *Objekt* を生かすとは價値に關係させて眞なる内容を限定することではなく、事柄の原始的相を明にするといふ事であり、事柄の原始態とはそれを包む全體に於けるその配置的姿態であるとするならば *Sosein* の *Objektiv*こそは *Objekt* に對してその原始態を明ならしむることの意味で具象的、又その全體であるとの譯で、普遍的なる事態である。形式論理學に於ては個別的なるものと普遍的なるものとの關係を類と種の上下段階に作り上げ、その階梯の決定に當つては内包の從て外延の數量的異同を以て標準とするのであるが、かゝる上下附は前述の如く畢竟反省的妥當を持ち得るに止る。眞に對象に就て類と種との關係を見ようとするならば、對象とそれの原始態とに就て言はれるのでなければならぬ。而して對象の原始態とは直前に述べた通り具象的にして普遍的なるもの約して具象的類と稱し得る。フツセアルは論の最初に引用した様に *Konkretum* を最低の種差とする所の類は具象的類であると言ふが、*Konkretum* とは對象を原始態への關係に於て見た場合に言ひ得る事である。而して事柄を類と種の系列に秩序づける所の手續である。*Generalisierung* とは對象をその原始態に還元しよとの觀方、對象を全體的連續の切斷

としてみる仕方に他ならないと思ふ。論理的形式化が事柄を價値の原理に従て取り分けようとするに對してこゝに謂ふ意味での具象的普遍化は可能性の原理に従て物の紛れない最初の相を取戻さうとするのである。Generalisierung とは對象的な具象態への普遍化或は還元を意味する。

かゝる具象的類を求むる手續としての普遍化を承認する事の一つの大いなる效果と考へられるのは従來論理學上姑息なる方法を以てしか説かれなかつた所の概念に就ての敎説に對してその解決に一道の光明を與へる事である。私は普遍化の特質を一層明にする目的をも意識しつつ、普遍化の觀念が概念論に對して如何なる重要性を持つかを次に考察しようと思ふ。

## F

概念の解説に方つて論理學上の唯物論を信じて内容上固定せる概念が存し判断は單にそれを關係せしめたものに過ぎぬと解しない以上は、概念と判断とは論理上同一の構成を有する事は輓近論理學者の等しく認むる所である。(Sigwart, Rickert 前掲書、紀年正美論理學綱要三九頁以上参照)又概念の特質として普遍性を擧げそれに

關聯して概念は抽象即ち個々の事物の標徴の内から共通なるものと然らざるもの  
 とを取り分け、共通なるものを總合して構成さるゝとの通説に對しても亦シグワルト  
 以下の論理學者が一齊に反對し全く其根據なきものである事が判つた。(Vgl. Sig-  
 wart, Logik I. Bd. s. 333ff. 左右田博士「經濟哲學の諸問題」八三頁以下)——斯く輓近論理  
 學は概念の實體化と機制化とに反抗の氣勢を示して居るに拘らず、今仍、概念化と言  
 へば事柄と形骸化しそのものゝ生命を奪ふかの如く一般に考へられて居る。それ  
 は何れ由來するのであらうか。私はその原因の一つは概念を偏へに論理的形式化  
 の見地から見るからであるかと考へる。責の歸する所は論理的形式化であつて概念  
 自らではない。概念も一度右に規定した意味の具象的普遍化の見地に於て解すれ  
 ば流動性のない死せる形式とのみは觀じ得ないのである。

却て普遍化の見地からすれば概念とは對象を *Konkretum* として觀じたものと解  
 される。其は常に全體への關係を含むで居る。論理學上概念を判斷に直して考へ  
 ようとするのも同じ意向であらう。然し普遍化に際して概念が分るべき *Objektiv*  
 は判斷の如く價値の原理に支配さるゝものではない。判斷はある一定價値に係ら  
 しめられその限りで個別化された規定を賦與するが、普遍化に依る *Objektiv* はそれ



とは反對に對象の原始態を明にするとの意味で對象の個別的屬性を除去し適當の意味に於て普遍なる相を顯現せしむるのである。概念化するといふ事は物の本來ある相への還元であつて偏つた形式化と解する事は出來ない。價值觀點の下に事を形式化するのは其價值の係る範圍では意味が限定されるときも、既に矛盾の原理に依つて他の價值系列への連絡が斷絶されて居るのであるから全體への意味は減せられこそすれ増される事はない。所が普遍化に於ては可能性の原理に従つても全體への連繋が保たれて居る。一つの普遍化の系列は可能界の一つの可能なる方向に過ぎない。

この普遍化の系列それ自らが内部に於ても外部に對しても連續的であるといふ事の結果として、概念は常に其背後にその全體としての連續と豫想し、自らはその切斷その極限點としてのみ理解され得るのである。こゝでは抽象といふ如きことは少しも見出され得ない。例へば色の概念に於て明暗といふ内包は個々の赤・綠・青に就ての明暗を抽象して作られたものではなく、色といふ連續體の一方方向たる明暗の系列に於ける位置を指すに他ならないのであつて、其は終始兩極への方向を含むものとして相對的に規定されるものである。この事は明暗のみならず色の連續體の

全ての内包、そればかりでなく延ひては凡ゆる連續體の内包の規定に及ぼさるべきである。<sup>\*</sup>而して元來概念は普遍化の見地に立てば連續體の切斷としての Konkretum を意味すべきであるとするならば、其内包が其連續體に於て成立する可能なる系列と考へられるのは當然と言はねばならぬ。

\* マイノングは種々なる連續體の概念構成に對する特質を諸處は述べて居るがその據る所は多く心理學的である。私は其に依つて少からず示唆を受けた事は勿論であるが必ずしもその儘を信奉し主張しようとするものではない事は斷つて置かねばならぬ。(Vgl. Meinong, über Begriff und Eigenschaften der Empfindungen, Ges. Abhandl. I. Bd. s. 114ff, Derselbe, Abstrahieren und Vergleichen, Ibid. s. 486ff, Auch. Phantasie-Vorstellung und Phantasie, Ibid. s. 201)

從て内包を規定する系列の異なるに應じて同一對象も異つた内容を以て表されると共に、一つの對象は既に同一内包を以て規定さるべき多くの對象も豫想する。概念として恰も固定せる一つの對象であるかの如く見ゆるものも、同一内包の系列に屬する無限の對象の極限であり、そのやうな意味に於てのみ定立されて居るに過ぎない。之れは無限の程度的差異を許すものとして典型 Typus と呼ばれて良いであ

らう。概念は普遍化の立場から之れを見ると内包的系列の極限といふ意味に於て典型と考へられる。而して此處に謂ふ内包的系列とは可能性の原理に支配さるゝ連續體を意味するに他ならない。故に其處で重要なのは外延の壽量的異同ではなく、内包の連關である。さうであるから概念は對象を *Konkretum* とみる事に依て對象を凡ゆる可能なる内包的系列の極限となしその原始的にして具象的な相を闡明ならしむるもの、凡ゆる對象の明晰化の契機、生の源泉となる。

\* \* \*

以上私はフツセアルの所謂形式化と普遍化との異同を尋ねる事に依て、價值的措定と中和的還元存在とその原始態、延ひては個別科學的態と哲學的態との區別に就て多少ながら明にし得た事を信するものである。

〔大正十五年五月二十六日〕